

7.1閣議決定への反撃に立ち、安倍、葛西、JRの手先=東日本本部を打倒しよう

熱海大会は何を生み出したか

国労東日本本部第28回定期全国大会にあたって訴える

国鉄分割・民営化に反対し、1047名解雇撤回を共に闘う国労の会(略称「共に闘う国労の会」)
〒111-0041 東京都台東区元浅草2-4-10 5F / 電話 03-3845-7461 F A X 03-3845-7463
メール tomonitatakukai@yahoo.co.jp ホームページ <http://www.tomonitatakukai.com/>

国労東日本本部第28回定期大会に参集した代議員・傍聴者、そして組合員・国鉄、関連労働者のみなさん!

集团的自衛権行使容認の7・1閣議決定後の国労東日本本部大会をめぐる攻防は、国労全体の今後だけでなく日本労働運動の行く末をかけた闘いだ。戦争に突入するか、階級的反撃でプロレタリア革命のとば口を開くのか、大会代議員は歴史的使命を帯びた重大な責任を負っている。

第83回全国大会は、現場組合員と腐った執行部のあからさまな非和解放決情勢を切り開いた

7月31日～8月1日に熱海で開催された第83回全国大会で何が起きたのか。それは、外注化・非正規職化に怒り闘おうとする全国の現場組合員・青年労働者と、JR体制にズッポリと抱え込まれて連合合流をたくらむ国労ダラ幹との対立が非和解放的に表面化したという事態だ。JR東日本に身も心も売り渡してきた東日本委員長・松井が、会社に言われるままに絶望的な労働代官として現れたのだ。同志だったはずの石上では、現在の集团的自衛権行使=戦争情勢・JR体制崩壊情勢・国鉄闘争全国運動の国鉄闘争の前進情勢を乗り切れないとばかりに石上を辞任に追い込み、賞味期限切れの高野を担ぎ出したのだ。国鉄闘争を解体できないまま、明文改憲ではなく解釈改憲で乗り切ろうと

する安倍の危機的対応と同じく、まったくぶざまな有り様だ。

松井よ、上等だ! 新潟での新津車両製作所決戦を引き継ぐ、10月1日郡山工場外注化阻止闘争の爆発と9・3組合員資格確認訴訟判決で現場組合員・青年労働者の自己解放的決起を呼び覚まして、高野一松井-JR体制をさらに追い詰め打倒して革命をグッと引き寄せよう。

さらに、日共一革同ダラ幹どもも、もろ手を挙げて松井に賛成した。口先だけの日共一革同の本音が暴かれた。資本と労使協調派に許しを請い、連合参入を画策する憐れむべき態度だ。現場組合員の誰一人として説得できない裏切りだ。国鉄決戦でスターリン主義を最後の打倒する歴史的チャンスの到来だ。

集团的自衛権行使許さず、戦争協力拒否する闘いを

今大会の最大の課題は、集团的自衛権行使容認の7・1閣議決定に対する全国鉄労働者の根底からの怒りの反撃を組織する方針を確立することだ。

7・1閣議決定の核心は、ついに日帝が自ら戦争主体となり、世界市場の分割戦に参戦することだ。日帝は対米対抗的な独自の侵略戦争に絶望的に突き進もうとしている。同時に、日本の労働者階級が戦後一貫して闘い守ってきた戦争絶対反対の一切を根底から破壊しようとしている。階級対階級の激突が、職場・生産点を最大の焦点に爆発する情勢だ。

国鉄分割・民営化反対と1047名解雇撤回の闘いこそは、「戦後政治の総決算」を叫んだ中曽根政権以来の戦争・改憲の攻撃に立ちはだかつてきた。その闘いを4・9政治和解で自ら解体した国労本部ダラ幹は、今また「しかるべき選挙では、憲法を破壊し、『戦争する国』に突き進む安倍政権の一連の暴走に対して国民の厳しい審判が下ることは必至である」(7月1日付国労本部声明)などと、組合員を民主党や細川一小泉連合に屈服させ、戦争への協力に導こうとしている。4・9和解で「金で解決、雇用は別途」とばかりに屈服して解雇

撤回を闘えない勢力は、戦争絶対反対も貫くことはできない。格好つけの戦争反対ではなく、心底からの叫びと行動としての階級的な反戦闘争こそが真価を発揮する。

7・1閣議決定は歴史を画する事態だ。だが、絶望的に追いつめられて右往左往しているのは安倍政権だ。安倍と一体になった、国家的不当労働行為の張本人=葛西などの鉄道輸出の成長戦略はタイ・ベトナム・インドでとん挫している。大恐慌が深まり、帝国主義間・大国間の争闘戦が軍事化・戦争化する中で、わきあがる労働者階級人民の怒りをさらに全面的に解き放てば、プロレタリア革命へ前進できる。

国鉄闘争全国運動の6・8集会は、ついに韓国鉄道労組との歴史的連帯・団結を掴み取った。民営化反対で長期ストライキをもって極限的に闘う韓国鉄道労組との団結が、資本と闘う労働者同士の国際連帯が、JR総連・革マルの策謀を打ち破って大きく前進している。

今こそ階級的労働運動の再生と再創造をめざして国鉄闘争全国運動を巨大に発展させ、7・1閣議決定弾劾、戦争絶対反対の闘いに立ちよう。それが国鉄労働者の第1の重大な任務だ。

反合・運転保安闘争路線の前進が、戦後労働運動の新たな局面を開く

今大会の課題の第2は、外注化強行に対して新たな反合・運転保安闘争を切り開いた動労千葉の5・2ストライキ、これと一体となって打ち抜かれた動労水戸の常磐線竜田延伸阻止・被曝労働強制反対の3

波のストライキの意義を掴み取り、民営化・外注化反対、非正規職撤廃の新たな地平の団結形成の展望を明らかにすることだ。

動労千葉は、JRのズサンな「外注労働者の教育・養成」を弾劾し

て、このままでは安全が崩壊して事故の責任が外注労働者に押し付けられる！と、5・2ストに起った。本労働者が下請け労働者の問題を、安全をキーワードにしてストライキに起った。根底的な産業別単一労組形成への挑戦を開始した。非正規職を蔓延させる新自由主義と全面対決する新たな挑戦だ。

動労水戸は、安倍政権の「復旧・復興キャンペーン」の焦点としての、常磐線竜田駅延伸攻撃を3波にわたるストライキで決定的破綻に追い込んできた。

橋葉町長は帰町宣言を先送りせざるを得なくなり、「金目(当)でしょ」の石原環境相は中間貯蔵施設問題で地元に入ることも出来ないありさまだ。東労組は、組織崩壊の危機を感じ取り、延伸計画を妥結できないで来た。国労東日本と水戸地本・菊池の率先妥結を、本大会

の名をもって徹底的に弾劾しなければならない。福島労働者が、日々、被曝労働と被曝生活を強いられていることをハッキリとさせよう。4年に及ぶ仮設住宅暮らしをわが身の問題として考えよう。もはや、限界だ。

どんな困難や制動があろうとも、階級的労働運動の前進と合流することによって、国労現場組合員が4・9政治和解に対する半ばのあきらめ感を打ち破り、労働者階級の誇りを取り戻して、自己解放的な闘いの主人公としてよみがえることは絶対に可能だ。国労新潟の新津車両製作所分社化反対の3・10デモはその現実性を示した。何よりも、10・1外注化阻止へ支部九ごとの決起を開始した国労郡山工場支部の仲間が、そのことを身をもって示している。

「被爆地—福島のもの！」 「年休時季指定権確立のもの！」 国労郡山工場支部で階級的労働運動の国労再生をこじ開けよう

第3の課題は、国労に階級的労働運動の拠点を形成することだ。

国労郡山工場支部は6月30日、満を持して「10・1外注化阻止」門前支部集会を開催した。外注化阻止の狼煙は上がった。時あたかも、動労水戸が被曝労働反対の第3波ストライキ決起でJRと東労組を追い詰めていた。郡工支部集会宣言(別掲)は根源的・感動的文書として組合員に受け止められ、翌朝には門前で全郡工労働者に配布された。典型的な職場闘争が開始された。職場こそ労働運動の戦場とした組合員の確信を満展開する国労運動の前進だ。7月16日には「安全無視・偽装請負・強制出向の外注化」を止めるための公開学習会が森川文人弁護士を招いて開催された。「外注化を自然災害のように受け止めない。『しようがない』としてしまわず、問題点を一つひとつ記録して暴いていく」「違法かどうか以前に、自分がおかしいと思うこと

を声にしていくことが大事」と徹底討議を行った。

わずか3カ月の虫食い教育期間で外注先会社の新採労働者に業務を強制する安全無視の外注化・丸ごと外注化にいたる非和解的攻撃を阻止するため、郡山工場支部はあらゆる闘いの組織化を開始した。組合の違いを越えて、正規と非正規が団結を求めて闘いはじめた。しかも被曝現地の闘いだ。「錆びついた歯車が油を得てギンギンと回りはじめた」(橋本郡工支部書記長)と言うように、国労郡山工場支部や動労水戸の闘いは、今もお高線量の被曝現地・福島200万人の労働者の生きるための闘いだ。その根底的な息吹き・生命力を全国単一労組の国労組合員こそ共有しよう。すべての皆さん、国労郡山工場支部とともに闘い前進しよう。

組合員権を奪った本部ダラ幹から、現場に国労を取り戻そう

今大会の第4の、そして最も重要な課題は、組合員資格確認訴訟の9・3判決を前に、「解雇者は組合員ではない」「和解で不当解雇ではなくなった」とする国労本部ダラ幹の裏切りと転向を暴き、現場組合員の手で1047名解雇撤回闘争をよみがえらせて、4・9政治和解の大反動を打ち破ることだ。

和解を拒否し組合員資格を奪われた4人の被解雇者は、国労本部を相手に闘ってきた。訴訟の過程で国労本部と宮里弁護士は「国労は一貫して企業内組合だ」「解雇者は組合員ではない」と、国労の闘いの歴史を改ざん・冒涇(ぼうとく)し、「和解で不当解雇ではなくなった」(濱中保彦前書記長の法廷証言)とまで言い放って、現場組合員の誇りと尊厳を踏みにじってきた。分割・民営化反対を貫き、1047名解雇撤回を闘ってきた誇りある存在が俺たち現場組合員だ。口先で「産別単一団」を叫ぶ革同幹部は、この裁判で国労本部連合派と宮里弁護士が主張する「国労は企業内組合」論に諸手を挙げて賛同している。本部・エリアの革同幹部も、連合派の国労幹部と一体だ。口先論者は労働運動・階級闘争にとって敵対物でしかない。

スト権剥奪(はくだつ)のマッカーサー書簡・公労法体制と実力で闘ってきたのが1957年国鉄新潟闘争以来の国鉄労働者の闘いだ。それは、国労が解雇者を組合員として守ってきた闘いの歴史だ。

今こそ職場から民営化・外注化反対、非正規職化阻止の階級的労働運動を実践しよう。命脈の尽きた分割・民営化=JR体制を打倒しきろう。JR貨物の絶望的破綻と石田体制の凶暴な攻撃を絶対に許さない。敵対物として登場した全貨協一革同ダラ幹を打倒して貨物労働者の根底的反乱を組織しよう。青年労働者のほとぼしる怒りと熱情を団結させよう。マルクス主義をよみがえらせ、腐りきった本部ダラ幹を打倒し、新たな階級のリーダーをつくり出そう。

9・3組合員資格確認訴訟判決から10・1郡工外注化絶対阻止へ闘おう。すべての職場に「共に闘う国労の会」を組織して、国鉄闘争全国運動の新たな発展を闘いとうろう。8・17(戦争・原発・首切りの安倍をととも倒そう日比谷集会)から10・1郡工外注化阻止!—11月労働者国際連帯闘争に攻め上ろう。

集 会 宣 言

会社は、機器着脱業務、主電動機大修工事の一部業務、車輪旋盤業務の外注化を10月1日に実施しようとしている。この外注化拡大施策はドロ船だ。外注化にあたる教育期間はたったの3ヶ月。そのうち要員数も減らされる。会社は毎日「安全・品質」を唱える。そして日に日に嘘の数が増えている。車両故障件数は他の総合車両センターと比べ、ダントツに多いと言う。チェックシート、移動禁、付け焼刃はもう限界だ。外注化は、90年の歴史で蓄えられた技と知恵をさらに奪い取る。車両が泣いている。道具が泣いている。機械も泣いている。このドロ船の向かう先は、JR北海道問題か、それともJR西日本福知山線事故なのか。

管理者たちは、耳を塞ぎ聞こえないふりでいる。まるで他人事のように。そして声をあげる者たちの意思を砕く。東労組はどうだ。国労を去っていったのは、工場を守るためだったはず。なのに何だこのあり様は。私たちはあなた達を責任組合とはもう呼ばない。郡総を守るために本当に必要なのは、私たちがだということを知覚した。私たちは何も当てにはしない。誰のせいにもしない。私たちは責任持つ者として決断した。10・1外注化は阻止する。「事なかれ」じゃもう救えない。このままでは郡総の未来は創れない。私たちは自らの力を頼みに、職場でふんばっている東労組組合員や、頑張っている外注会社労働者、そして心ある地域の仲間といっしょに、10・1外注化を阻止する。明日も職場で笑いたい。職場が好きだからこそ変えたい。希望や夢を抱えて仕事をしたい。私たちはあきらめない。不利なことばかりが目につくけれど、私たちは前を向いて歩く。今こそ示そう、私たちの明確な意思を。10・1外注化阻止! 職場は私たちが守る。職場の未来は私たちが創る。団結して頑張ろう!

2014年6月30日
10・1外注化阻止! 国労郡山工場支部集会